

## 実践のまとめ(第2学年 国語科)

令和3年10月27日第5校時

指導者 燕市立吉田中学校

教諭 野俣 光樹

### 1 研究テーマ

#### 豊かな言語感覚を身に付けようとする生徒の育成

～正確に理解したり適切に表現したりする力を高める言語活動の反復を通して～

### 2 研究テーマについて

#### (1) テーマ設定の意図

新学習指導要領(平成29年3月告示)において、国語科の目標の(3)には、「言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、」とあり、国語を通して「正確な理解」や「適切な表現」を育成するために豊かな言語感覚を身に付けることが必要であると述べられている。これまで関わってきた中学生を振り返ると、自分の考えを正確に伝えられない生徒や、相手の言葉の意図をくみ取ることが苦手な生徒が一定数存在した。それらは語彙力の不足が招く問題と仮定し、語彙力を高める言語活動を繰り返し行ってきた。しかし、新指導要領には、何か一つだけを取り上げて高めようとするのではなく、言語活動を通して、複合的に関連させ合いながら高めていくことが必要であると示されている。この、複合的に関連させ合いながら高めていくことを、「豊かな言語感覚を身に付けようとする生徒の育成」というテーマにまとめ、単元全体を通して複数の資質能力を高める言語活動を仕組むこととした。「言語感覚」とは、「言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚」「相手、目的や意図、場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを直感的に判断したり、話や文章を理解する場合に、そこで使われている言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりすることができること」と『新学習指導要領解説』に明示されている。ただし、これらは一度の授業や一つの単元で身に付くものではないため、いくつもの単元で反復することが肝要であると考えた。

#### (2) 研究テーマに迫るために

##### ① 基礎的・汎用的読解力の育成

新井紀子とその著書『AI vs 教科書が読めない子どもたち』の中で示した、「基礎的・汎用的読解力」の育成を図る言語活動を仕組むことで、言葉(文章、会話等)の正確な理解を育成する。語彙の正確な意味と実践的な使い方を身に付けるために、教科書本文に出現する重要語句を取り上げ、個人で短文作りに取り組み、少人数でその語彙の使い方の検討会を行う。また、文章の構成を掴むために、文章を要約しながら全体を図化する。

##### ② 表現の効果に注目した言語活動の設定

言葉それぞれが持つ印象の違いや、提示の仕方に変化する効果について、二つの文章を比較する言語活動、表現の効果を意識した「書く」活動、交流を通して「書き手」「読み手」の二つの立場から表現の効果について検討する活動の三つを、単元全体を通して行なう。

#### (3) 研究テーマに関わる評価

次の二つの観点から評価を行う。

① 自身の「言語感覚」が高まったと実感する生徒が8割を超える。

② 表現の効果の違いを意識して「書く」活動に取り組むことができた生徒が8割を超える。

### 3 単元と指導計画

**(1) 単元名**

効果的に表現する 「正しい」言葉は信じられるか 香西秀信 (新しい国語2年)

**(2) 単元の目標**

- ・抽象的な概念を表す語句の量を増すとともに、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。(知識及び技能(1)エ)
- ・表現の効果の違いを意識しながら、一つの出来事について二つの立場から作文することができる。(思考力・判断力・表現力等 書くこと…推敲エ)
- ・話し合い活動において、使われている表現の意図について考え、言語感覚を豊かにしようとするすることができる。(学びに向かう力、人間性等)

**(3) 単元の評価規準**

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	語彙の持つ意味を正しく把握し、適切に作文に使用している。(1)エ	①「読むこと」において、観点を明確にしながら表現の効果の違いを読み取っている。(Cエ) ②「書くこと」において、表現の効果の違いを意識しながら作文している。(Bエ)	間違いや勘違いを恐れずに作文に取り組んだり、話し合いに積極的に参加したりしようとしている。

**(4) 単元の指導計画と評価計画(全5時間、本時4/5時間)**

次(時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1次 (2)	・教科書本文の内容理解	・重要語句を用いた短作文づくりと検討会で語彙の適切な意味と使用方法を確認する。 ・本文の構成を図化し、全体の内容を把握する。	<b>態</b> 短作文づくりに積極的に取り組む。【観察・ワークシート】 <b>態</b> 話し合い活動に積極的に参加している。【観察・振り返りシート】
2次 (1)	・教科書本文に出てくる例と、実際の新聞記事を用いて、表現の違いが与える印象の違いを確認する。	・教科書に提示されている5つの例について、それぞれ観点を明確にしながら印象の違いについて確認する。 ・教科書の例を参考に、実際の新聞記事を比較して、表現の違いと印象の違いについて話し合う。	<b>思・判・表</b> 観点を明確にしながら表現の違いが与える印象の違い(表現の効果)を読み取っている。【ノート】 <b>態</b> 話し合い活動に積極的に参加し、印象の違いについて自分の意見を説明している。【観察】
3次 (2)	・作文活動について確認する。 ・一つの事実について、異なる二つの立場からの出来事の文章を作文する。(本時) ・作文したものを相	・作文する内容は「オリンピックの開催と新型コロナウイルス感染の拡大」とし、「開催肯定派」と「開催否定派」の立場で作文する。 ・相互評価の話し合いでは、読み手に与える印象の違いについて意見交換する。	<b>思・判・表</b> 表現の違いを意識しながら作文している。【ワークシート】 <b>知・技</b> 語彙を適切に使用して作文している。【ワークシート】 <b>態</b> 話し合い活動に積極的に参加し、使われている表現が与

	互評価する。		える印象について自分の考えを説明している。【観察・振り返りシート】
--	--------	--	-----------------------------------

#### 4 単元と生徒

##### (1) 単元について

本単元は、書き方次第で読み手に全く違う印象を与えてしまう表現について、具体例を交えながら解説している文章である。中学生が普段はあまり意識しないような、情報を出す順序や言葉の選び方によって、与える印象が違うことが分かりやすく示されている。

これまでの説明的文章の授業において、語彙力を高める短作文や文章構成の図化は何度か行っている。本単元でも繰り返すことで、基礎的汎用的読解力の育成を図る。また、短作文を行って得られる語彙についての正確な知識は、本単元で設定している言語活動にも役立つと考えられる。

言語活動では「オリンピックの開催と新型コロナウイルス感染の拡大」をテーマに「開催肯定派」と「開催否定派」の二つの立場から、「二つの出来事を結び付けた一つの実事」として作文させる。教材文で学習した、「情報の順序」「言葉の選び方」といった観点から、比較的容易に全く異なる印象を持つ文章が作成できることを示したい。

##### (2) 生徒の実態

本学級の生徒は、男子 16 名、女子 17 名の計 33 名で構成されている。全体的に明るく、活発な雰囲気を持っているが、学力の二極化が進んでいる。また、学習に対して真摯に取り組む姿が多く見られる一方で、分からないことを分からないままにしている姿も見られる。

国語の学習において、短作文づくりや少人数での話し合い活動、タブレットを使った学習に何度も取り組んでいるため、新しいことや未知のものに対する抵抗感は少なく、意欲的に取り組むことができる。

#### 5 本時の展開

##### (1) ねらい

一つの事実について、異なる二つの立場からの説明となるよう、表現の効果の違いを意識しながら作文する。その際、言葉の持つ印象に留意しながら、適切に使用する。

##### (2) 展開の構想

本時では、前時まで学習した表現の効果の違いと与える印象の差を活用して、「オリンピックの開催と新型コロナウイルス感染の拡大」という事実について、「オリンピック開催肯定派」「オリンピック開催否定派」の二つの立場に立ち、事実を説明する文章を作文する。作文するに当たり、ミライシードのムーブノートを用いて作業する。また、必要に応じて検索することも想定されるため、ChromeBook を準備しておく。生徒の実態として、白紙の状態からの作文に困難を感じる生徒が一定数いるため、キーワードを準備しておく。さらに、一定時間が経過したところで班内での情報交換・助言のための話し合い活動を仕組む。

「言葉による、自己と他者の受け取り方の違い」について、既存の知識と経験を駆使しながら作文に取り組むことが必要となる。

##### (3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働きかけ 予想される生徒の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
-----------	------	-----------------------	--------------

10	○漢字5問テスト ○導入、課題提示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パワーポイントを用いてテンポよく行なう。</li> <li>・オリンピックの話題に触れ、印象に残っている場面などを振り返る。</li> </ul>	◇隣の席の級友と会話をさせてから発言を促す。
表現の効果と与える印象の違いに気をつけながら、二つの立場からの説明文を書こう。			
35	<p>○テーマの説明</p> <p>○どちらかの立場からの作文をムーブノートで書き始める。</p> <p>○情報交換と助言のための話し合い活動。</p> <p>○話し合いで得た情報をもとに作文の続きを行なう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「オリンピック開催と新型コロナウイルス感染の拡大」をテーマとし、「開催肯定派」「開催否定派」の二つの立場からテーマについて説明する文章を作成することを指示する。</li> <li>・1～5班が「肯定派」、6～9班が「否定派」の作文から始めるよう指示する。書き終わったらもう一方の立場からの作文を書き始めてよいことを伝えておく。</li> <li>・話し合いは、各班に指定された「広場」に作成した作文を投稿し、共有しながら行う。</li> <li>・話し合いをするときのポイントは、自分が調べた情報を班内で共有すること、どんな言葉を使って作文しているか、作文の進まないメンバーへの助言を積極的に行うこととする。</li> <li>・早く書きあがった生徒は作文の推敲をするように指示する。</li> </ul>	<p>◇ChromeBookでの検索に時間をかけ過ぎないように声掛けをする。必要に応じて検索ワードなどの助言を行なう。</p> <p>○書き始められない生徒に対して、机間支援で助言を行なう。</p> <p>◇「広場」の間違いやタブレット操作の誤りがないよう、ICTサポーターに協力してもらう</p> <p>◇話し合いのポイントはパワーポイントで話し合いの間、提示しておく。</p> <p><b>態</b>話し合い活動に積極的に参加しているか。</p> <p>◇推敲の注意点をパワーポイントで提示しておく。</p> <p><b>思・判・表</b>表現の効果を意識しながら作文しているか。</p> <p><b>知・技</b>語彙を適切に使用しているか。</p>
5	○自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習カードに本時の振り返りを記入する。</li> <li>・まとめ</li> </ul>	◇次時の連絡を行い、発表の心構えをさせておく。

#### (4) 評価

- ・一つの事実について、異なる二つの立場からの説明となるよう、表現の効果の違いを意識しながら作文していたか。(思考・判断・表現)
- ・語彙の持つ印象に留意しながら、適切に使用していたか。(知識・技能)

## 6 実践を振り返って

### (1) 授業の実際

本時の導入では、オリンピックの話題を出しながら、印象に残った場面を思いつづまま出させ、共有した。いくつかの発言の中から、新型コロナウイルスに関連する話題を取り上げ、本時のねらいに繋げていった。ねらいを提示した際には、前時までの学習を想起させ、印象の違いを生み出す表現の効果(情報の順序・言葉の選び方)を確認した。そこから、本時の学

習活動でもある、作文活動について示し、手順を説明した。作文のテーマは『東京オリンピックが行われたこと』について、【肯定的立場】【否定的立場】から説明する、学校新聞の記事の作成」とし、作文の条件として「東京オリンピック」「新型コロナウイルス感染症」の二つの事実を関連付けることを提示した。(図1)

作文活動には Chromebook を使い、ミライシードのムーブノート内で作業できるようにした。生徒はこれまでの経験から、スムーズに活動に取り掛かり、「パソコンなら書ける気がする」といった言葉が何人かから聞こえてきた。ムーブノ

<p>「東京オリンピック」と「新型コロナウイルス感染症」という2つのキーワードを結びつけて、今年開催されたオリンピックについて200字以内で作文しましょう。</p> <p>【作文の条件】</p> <p>①「学校新聞に掲載する記事」として作文します。感情的な言葉や、ただの感想のような表現は使わないように気をつけてください。</p> <p>②オリンピックが行われたことについて「肯定的な立場」「否定的な立場」の両方から作文します。言葉の選び方、情報の順番に気をつけて作文してください。</p>	<p><b>全員用 作文に使えるデータ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピックにおける感染対策として、イラストで説明(別カード参照)</li> <li>・無観客で開催された。</li> <li>・TV中継</li> <li>・「おうちで五輪観戦」「巣ごもり」などの外出を控えるための言葉</li> <li>・選手として来日する外国人への感染対策が空港、選手村、会場で行われた。</li> </ul>
<p><b>全員用 作文に使えるデータ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8/8(閉会式前日)時点での感染者数(累計) 出入りする各種業者(236人)、大会関係者(109人)、メディア(25人)、ボランティア(21人)、選手(29人)</li> <li>・日本チームの獲得メダル数 歴代最多の58個(金27 銀14 銅17)</li> </ul>	<p><b>全員用 作文に使えるデータ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピック開幕日(7/23)の新規感染者数...東京1359人 全国4082人</li> <li>・オリンピック閉幕日(8/9) の新規感染者数...東京2952人 全国12912人</li> <li>・閉幕から2週間後(8/23)の新規感染者数...東京2447人 全国16943人</li> <li>・新規感染者数のピーク...東京5405人(8/20) 全国16943人(8/26)</li> </ul>

(図1)

ートで作成するカードは元々200字の字数制限があり、作文に抵抗感を示す生徒には喜ばれ、作文を苦しめない生徒は「短すぎて難しい」等の言葉を発した。

活動を円滑に進める手立てとして、生徒端末の「私のノート」内にあらかじめヒントカードを2種類用意した。一つ目は全員が参考にできる、オリンピックや新型コロナウイルス感染症に関する事実を箇条書きにしたカードと、オリンピックにおける感染症対策をイラストで示した公式の資料である。このカードに書かれている情報を使えば、肯定側でも否定側でも作文できるようにした。ヒントカード以外の情報を使いたい場合のみ、自ら検索してもよいこととした。もう一つのヒントカードは「作文が苦手な人用」として、「作文が得意ではないと感じている生徒だけが見てもよい」という条件を付けた、作文の書き出しを含めたいくつかの例文を【肯定側】【否定側】に分けて用意した。

初めの作文活動は10分で区切り、1～5班は肯定側から、6～9班は否定側から作文を始めた。時間内で作成できた分までをそれぞれの班ごとに分けた「広場」へ送り、共有した状態でアドバイス活動を行った。ある班では、メンバーの作文を読みながら「この書き方がいいね、使わせて!」といった発言があり、相手も得意げに了承する姿が見られた。また、作文が得意な生徒が白紙の状態のメンバーに、どの情報を使うと書きやすいかなどを教える姿が見られた。さらに、作文が得意な生徒同士が、どうしたら200字以内に収めることができるかを相談し合う姿も見られた。

話し合い後は、自分の作文に戻り、作文の完成と推敲を経て、全員で共有するための「みんなの広場」へ投稿させた。早く書き上げた何人かの生徒は投稿された文章を読みながら、上手だと思った作文に「拍手ボタン」を自発的にクリックする姿が見られた。

しかし、全体の2～3割の生徒が作文を時間内に終えることができず、本時のまとめである振り返りにたどりつけなかったため、翌日の学習活動の初めに、不十分な部分をまとめる時間を設定することになった。

## (2) 研究テーマに関わって ～豊かな言語感覚を身に付けるために～

本時の学習活動では、前時までの既習事項である「情報の順序」「言葉の選び方」を中心に、表現の仕方で印象が反対になる事実の述べ方を実際にやってみることで体感させ、言語感覚を養おうとした。

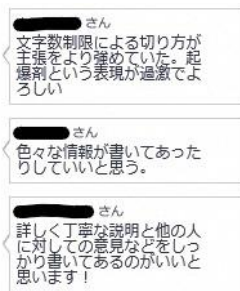
① 自身の言語感覚が「高まった」と実感した生徒が8割を超えたか。

単元の終わりに回収した振り返りカードの記述によると、「表現を変えると印象が変わることを体感した」「今まで使ったことのない言葉を使ってみた」という主旨の言葉が多く見られた。本時の学習を行なった31名の生徒のうち27名の記述に、「言語感覚が高まった」「語いが広がった」といった記述が見られ、4名の振り返りカードには「表現の仕方が難しく大変だった。」や「前から知っていることが多かったので、表現や語いの幅の広がりには実感できなかった。」という記述が見られた。

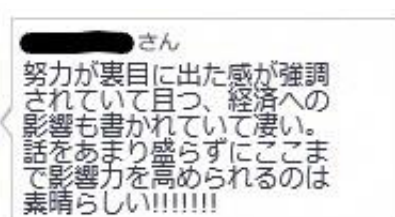
以上から、本時の活動を含めた本単元の学習活動により、言語感覚の高まりを実感することができたと言える。

② 表現の効果の違いを意識し、活動に取り組めた生徒が8割を超えたか。

前述の振り返りカードの記述からも明らかであるが、単元の終わりに相互評価として、班のメンバーの作文にコメントを付ける活動を行ったところ、表現の違いやその効果に関するコメントをつけた生徒が多かった。このことから、自身が作文活動を行う際も表現の効果の違いを意識しながらできたことと推察できる。各コメントは以下の図の通りであり、図2では「起爆剤という言葉が過激でいい」や、図3では「努力が裏目に出た感が強調されていて且つ、経済への影響も書かれていて凄い。話をあまり盛らずにここまで影響力を高められるのは素晴らしい!!!!!!」



(図2)



(図3)

これらのことから、8割程度の生徒は、表現の効果を意識しながら活動に取り組めたと結論付けることができる。

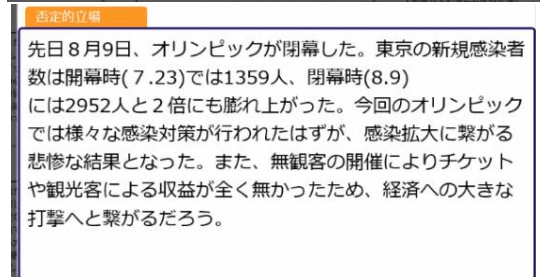
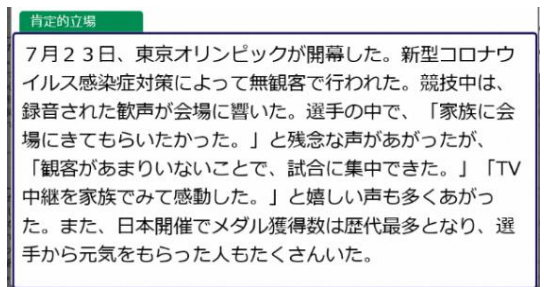
(3) 今後の課題

今後の課題として、次の二点が挙げられる。

- ・言語感覚の高まりを実感した生徒は多かったが、実際に完成した作文を見ると、データを並べただけのものや、ただの感想になってしまっているものも散見できた。相互評価の活動後に、作文についての自己評価と2回目の推敲を行えば作文技術の向上も望めたと考えられる。高まりを実感できたことを自信に、作文に限らず相互評価や比較などの活動を仕組み、表現の技術を高めていきたい。
- ・話し合い活動になっても生徒は端末を見ながら会話を進めることが多く、相手を見て話さない姿が目立った。ICTの特性とも言えるが、アナログとデジタルのベストミックスを目指すべく、活動によって切り替えていきたい。

(参考・引用文献)

新井紀子(2018)「AI vs 教科書が読めない子どもたち」東洋経済新報社



(図4)